

「将東遊壁題」 积月性



手前) 立志の詩碑  
奥 ) 清狂草堂  
(山口県柳井市遠崎)

将東遊題壁二首

まさにとうゆうせんとしてへきにだいすにしゅ

二十七年雲水身

にじゅうひちねんうんすいのみ

又尋師友向三津

またしゅうをたずねてさんしんにむかう

児鳥反哺応無日

じうはんぼまさひなかるべし

忍別北堂垂白親

わかるるにしのびんやほくどうすいはくのしん

男兒立志出郷関

だんじこころざしをたててきようかんをいづ

学若無成不復還

がくもしなるなくんばまたかえらず

埋骨何期墳墓地

ほねをうずむるなんぞきせんふんぼのち

人間到处有青山

じんかんいたるところせいざんあり

(意)

二十七歳となり、未だ修行の身である私は、こうして師や友を訪ねて大阪に向かう。今日まで勉学の為とはいえ、白髪交じりとなった母に仕えることもなく、他郷にばかりある自分を思うと不孝の罪を感じずにはいられない。しかしながら、この非常の秋、壮士止め難く、男子が一旦志を立てて郷里を出るからには、もし学業が成就しないなら再び帰らない決意である。骨を埋めるのにどうして故郷の墓地に執着しようか。世の中には、どこへ行っても骨を埋める青々とした墓地があるではないか。そこに埋めてもらえば充分である。